

論文

日本語教育における「ネイティブ」/「ノンネイティブ」概念

言語学研究および言語教育における関連文献のレビューから

田中 里奈*

概要

本稿では、「ネイティブスピーカー」という概念がどのように捉えられてきたのかを、主にアメリカにおける言語学研究、および、言語教育研究における議論から明らかにするとともに、日本語教育においてはどのような議論が展開されてきたのかを跡付ける。それらを踏まえ、今後どのような研究が必要とされるか、その展望を論じる。

キーワード

「日本語＝日本人」、権力構造、「ネイティブ / 母語話者」、
「ノンネイティブ / 非母語話者」

1. 問題の所在と研究目的

近年、日本語教育において、「日本人のような日本語」や「正しい日本語」の存在、そしてその習得を目指す教育の在り方に疑問が投げかけられ、「非日本人」を「日本人化」するための日本語教育とは異なる方向性が模索されている。

例えば、森本（2001）は、ボランティアの日本語教室の言説分析から、「日本人」には「日本語を完璧に操る能力」があり、「非日本人」の「日本語」を評価できるという特権を付与されていること、また、それによって、非日本人の「日本語」を逸脱としてみなす土壌が作りあげられていること

* 山口福祉文化大学ライフデザイン学部 (t_riina0917@hotmail.com)

を指摘している。また、鄭（2010）は、日本語学習者へのインタビュー調査から、「正しい日本語」としての「日本人の日本語」と「外国人の日本語」という「二分化された日本語」の存在を問題化し、外国人の日本語が逸脱とされ、「日本人の日本語」の下位に位置づけられていることを描き出している。さらに、牲川（2012）や田中（2006）などの研究においては、「日本語＝日本人」というイデオロギーが依然として維持されている戦後の日本語教育のナショナリズム言説の変遷が長期的なスパンで実証的に明らかにされている。

その一方で、「母語話者・ネイティブスピーカー＝標準」、「非母語話者・ノンネイティブスピーカー＝逸脱」という前提自体を問題化するような議論も行われている。例えば、大平は（2001）は、従来の言語学研究における「ネイティブスピーカー」の定義を概観し、「ネイティブスピーカー」という概念が相互行為の中で構築されるものであることを指摘し、二項対立的な前提への批判を展開させている。だが、言語教育という領域においては、「ネイティブスピーカー（以下、ネイティブ）」/「ノンネイティブスピーカー（以下、ノンネイティブ）」に関する議論やその問題点に関する議論は十分に深められているとは言い難い。果たして、言語教育において、ある「言語」の「ネイティブ」/「ノンネイティブ」はいかなる存在として捉えられてきたのであろうか。また、彼らの周囲にはどのような権力関係が構築されてきたのだろうか。さらに、そうした関係性を脱構築していく議論はこれまでどのように展開されてきたのだろうか。

本稿では、以上の問題意識にもとづき、まず、「ネイティブ」という概念がこれまでどのように定義されてきたのかを概観し、他の言語教育において展開されてきた「ネイティブ」/「ノンネイティブ」の概念に関する研究動向を明らかにする。次に、日本語教育という文脈においてはどのような研究が進められてきたのかを批判的に考察し、その問題点を探る。これらの検討を踏まえ、今後どのような視点からの研究が必要とされるか、その展望を描いていく。

2. 「ネイティブスピーカー」とは誰か

「ネイティブ」という概念そのものに疑問を投げかけた先駆的な研究として

は、Paikeday (1985=1990) が挙げられる。Paikeday は、日常的にも使用されている「ネイティブ」という用語の定義に悩み、さまざまな言語学者たちに定義に関する回答を求めた。そして、それらをもとに、紙上パネルディスカッションという形で議論を展開させ、*Native Speaker is Dead!* (1985=1990) というタイトルの書籍にまとめた。その中で、Paikeday は言語学者たちの「ネイティブ」に関する定義には大別して 2 通りあることを指摘している。

まず、1 つ目の定義は、「ある言語を母語 (mother tongue) または第一習得言語 (first learned language) として身につけている人」(p. 23) というものである。これは、辞書にも見られるようなもっとも一般的なものと考えられ、「ある言語のネイティブはその言語を幼児期から、その言語の使われている国に生まれたお陰で身につけた人」(p. 4) と定義づけたマクレオードなどによっても支持されている。

また、2 つ目の定義として挙げられているのは、「ある言語の有能なスピーカー (competent speaker) であって、その言語を慣用に則って (idiomatically) 使う人」(p. 24) といった捉え方である。これは、言語運用に関する有能さや熟達度にもとづいて、ある人を「ネイティブか否か」判断するといったものである。Paikeday の中では、「自分の言いたいことをどう言語の形にするかに関して、音声と文法に関する限り、全く何も考えないでよい人で、考えなければならないのは、文体、単語の選択といった種類のことに関してだけの人」(p. 65) といったドリアン の定義が、Paikeday の示した 2 つ目の定義と同様のものとして分類されている。

インド出身でアメリカに移住後、英語辞書の編纂に従事した経験をもつ Paikeday は、「いわゆるネイティブスピーカーと呼ばれる人でさえ、自分の身に付けた言語運用能力や文化レベルにはさまざまな個人差があり、決して絶対的なものではない」(p. 69) と、1 つ目の定義には懐疑的な立場を取っている。そして、そもそも、「ネイティブ」ということばは、ただ単に、「母語または第一言語のスピーカーであるという事実」を示すだけであり、「ネイティブ」ということばが指し示す対象物が実際に実存していることを証明できるわけではないと論じた。それにもかかわらず、それがいかにも存在するかのよう に想定されてしまっていることを Paikeday は問題視し、「「ネイティブスピーカー」は言語学者が想像した虚構の産物としてしか存在しな

い」(p. 26)と強く主張したのである。

上記の Paikeday (1985=1990) における議論を踏まえ、大平 (2001) は、さらに、言語学研究に大きな影響を与えてきたと思われる構造主義言語学のブルームフィールド、変形生成文法を唱えたチョムスキー、社会言語学のハイムズによる「ネイティブ」という概念を比較検討した。そして、①「誕生時、あるいは少なくとも幼児期から当該言語に接触している」か否かに焦点化した「時間説」、②「当該の言語使用における有能さ」に焦点化した「能力説」、③「現実のさまざまな要素に左右されず、言語能力を完全な形で発揮できる理想的な話し手」を「ネイティブ」とする「理想説」、といった異なるアспектから切り取られた3つの定義が混同されていることを指摘した。「ネイティブ」/「ノンネイティブ」という概念は、言語学研究においては、人間の言語現象をある一つの観点から描くための理論的道具として利用されてきたのだが、それにもかかわらず、今日、その存在が所与の事実として当然視されてしまっていることを大平は上記の検討から問題化したのである。さらに、こうした「常識」が受け入れられていくことにより、「ネイティブ=標準」/「ノンネイティブ=逸脱」といった前提 (Firth and Wagner, 1997) が強化されていってしまう危険性も指摘した。このように、「ネイティブ」という概念は、所与のものとして受け取られがちではあるが、Paikeday や大平の研究で示されているように、実際には、実体のない非常に漠然としたものであり、研究者や研究領域によってその捉え方も異なっているといえる。

3. 他の言語教育における「ネイティブ」/「ノンネイティブ」批判

3. 1 二項対立的な「ネイティブ」/「ノンネイティブ」の権力関係性批判

以上のような、「ネイティブ」という概念に対して、特に1990年代以降、主にアメリカにおける言語教育関係者の間ではさまざまな観点から異議申し立てが行われてきた。

その流れの1つは、「ネイティブ」と「ノンネイティブ」との間にあるとされる権力関係を批判的に考察した研究 (Canagarajah, 1999; Cook, 1999; Pennycook, 1994; Phillipson, 1992; など) である。

例えば, Cook (1999) は, 言語教育の現場において, 「ネイティブ」を言語能力や言語熟達度, 言語知識という観点から, 参照すべきモデルとして捉える考え方が依然として根強く支持されていることを指摘している。「初めて学んだ言語の「ネイティブ」がその言語の「ネイティブ」」(p. 187) といった従来の捉え方を取り上げ, この定義に従って考えると, 幼児期から学習しなかった第二言語学習者はその言語の「ネイティブ」にはなりえず, いつまで経っても「incomplete Native speaker (不完全なネイティブ)」(Byram, 1997, p. 11) として見なされてしまうことになることと批判している。このような観点から考えていくと, 理論的には「ネイティブ」の言語能力により近づくことは不可能ということになり, そもそも言語教育の到達目標として「ネイティブ」を設定することは大きな矛盾を孕んでいるということになる。しかしながら, 言語教育において「ネイティブ」を目標とする考え方は依然として根強く存在しており, それによって, 多くの学習者は学習意欲を失うなどの負の影響を受けてきたといえる。

そこで, Cook (1999) は第二言語学習者を「approximations to monolingual native speakers (単一言語のネイティブ話者の近似)」ではなく, 「L2 users (第二言語使用者)」と見なすべきだといった主張を展開させていった。第二言語学習者を「speakers in their own right (ある特定の言語の正統な話者)」(p. 185) として肯定的に捉える見方を提示したのである。このようなイメージが共有されていくことで, 「failed Native speakers (不完全なネイティブ)」(Cook, 1999, p. 204) といったネガティブなイメージは払拭され, 一言語しか使えない母語話者とは異なる能力をもつ「successful multicompetent speakers (複数の言語に有能な話者)」(Cook, 1999, p. 204) として学習者は自らを捉え, 「ネイティブ」に対するコンプレックスを捨て去ることができるようになるという。

このような「ネイティブ」/「ノンネイティブ」という概念の捉え直しを試みた Cook の主張は, 「ノンネイティブ」を「ネイティブ」よりも「劣ったもの」「不完全なもの」として捉える従来の研究とは異なる視点を提供しており, 「ネイティブ」神話への異議申し立てとしても興味深い。しかしながら, こうした議論に対しても, その後, そもそも「ネイティブ」や「ノンネイティブ」の内部にあるはずの多様性が固定化され, 「ネイティブ」や

「ノンネイティブ」が均質な集団として想定されているといった批判が展開されていった（例えば、Pennycook, 2007；Doerr, 2009；など）。こうした批判をさらに乗り越えるための視点や研究が必要とされているのが現状である。

3.2 「ノンネイティブ」教師への肯定的評価による権力関係の脱構築

一方、「ネイティブ」/「ノンネイティブ」の権力関係に関して、教師としての「ノンネイティブ」の有利な点を明らかにすることを通じて、その捉え方を変えていこうとする論考も多数報告されてきた。

例えば、Medgyes (1992) は、まず、「ノンネイティブにはネイティブの言語能力には決して到達することはできず、ネイティブとノンネイティブという2つのグループは明確な区分がある」(p. 342) と述べ、「ネイティブ」と「ノンネイティブ」の間には越えることのできない壁があるとした。しかし、その一方で、「ノンネイティブ」には、「ネイティブ」が持ち得ない強みがあるといった指摘も行った (p. 346)。例えば、「ノンネイティブ」教師は、「ネイティブ」教師のように完璧な言語モデルとはなれないが、「成功した学習者」というモデルを提示しようということ、また、言語学習ストラテジーが提供でき、教育・学習プロセスにおいて学習者の母語でサポートできることなどを Medgyes は挙げている。

このような「ノンネイティブ」教師に関する研究の多くは、「ネイティブ」教師に対して「ノンネイティブ」教師が有利だと思われる点や「ノンネイティブ」教師のもっているストラテジーに着目している研究（例えば、Amin, 2004；Cook, 2005；Liu, 2005；Widdowson, 1994；Phillipson, 1992；など）が多く、学習者のもつ文化的態度や信念、価値観などを熟知しているといった側面から「ノンネイティブ」教師を評価する研究となっている。こうした研究は、ことばや発音などの正しさなどの言語能力の観点ではない部分に焦点を当て、「ノンネイティブ」教師の資質を肯定的に捉え直そうとした研究といえる。

しかしながら、こうした研究に対しても、その後さまざまな批判が寄せられた。例えば、Doerr (2009) は、教授能力以外の部分で、「ノンネイティブ」教師を評価していくという議論の方向性は、「ネイティブ」が「ノンネイティブ」よりも言語面において優れた能力を持っているという発想自体の再考を促すことには繋がらないと指摘している。同様の指摘は、Widdowson

(1994) や Kubota (2009) などでも展開されているが、言語的な熟達度以外の部分で「ノンネイティブ」教師を評価するということは、「ネイティブ」が「ノンネイティブ」より言語的に有能で優位にあるといった論点を回避したにすぎない。「ネイティブ」の方が「ノンネイティブ」より優れているといった考え方への異議申し立てのために、新たな評価の軸を設け、それによって、「ノンネイティブ」の優位性を新たにフォーカスすることはできたが、これらの研究においても、「ネイティブ=標準」、「ノンネイティブ=逸脱」と見なす二項対立的な関係性を脱構築する視点の提供には至らなかったといえる。

3. 3 新たな「ネイティブ」/「ノンネイティブ」の権力関係性批判へ

以上、概観してきたように、1990年代以降、「ノンネイティブ」が「ネイティブ」に従属する位置に置かれているといった発想を問題視する研究や、「ノンネイティブ」教師には「ネイティブ」教師にはない資質があることを肯定的に評価する研究などが多数報告されてきた。これらは、いずれにしても、「ネイティブ」の優位性への異議申し立てを目指す文脈の中で行われてきたといえる。だが、「ネイティブ」/「ノンネイティブ」間の権力関係自体の再考を促すのであれば、未だ研究の蓄積は十分とはいえない。

例えば、Nero (2006) は、「白人」ではない英語の「ネイティブ」教師である自身の経験をもとに、「英語のネイティブ」のようには見えない、という理由から自身の *nativeness* が TESOL の現場で疑問視されてしまうことを挙げ、求人面においてもそうした影響があることを指摘している。こうした指摘は、「英語」の「ネイティブ」とされているのは「白人」であり、そのカテゴリーに、例えば、「黒人」や「アジア系の人々」などの有色人種が含まれていないといった認識が共有されていること、そして、それにより、たとえ「英語のネイティブ」であってもそのようには認識されづらいといった状況があることを示しているといえる。

また、Okubo (2009) は、日本の学校でのフィールドワークをもとに、“民族的には「日本人」ではないが「日本語」の「ネイティブ」である学生”が日本語のクラスに振り分けられてしまった事例をもとに、ある人を「ネイティブ」とみなすか、「ノンネイティブ」とみなすかという行為が、民族的な観点と密接に結びついていることを指摘している。

これらの指摘は、「ネイティブ」/「ノンネイティブ」という判断が、従来議論されてきた言語学的な「正しさ」という観点のみから付与されるものではないということを示しているといえる。従来の研究では、「ネイティブ」や「ノンネイティブ」の権力関係に関する議論が言語学的な「正しさ」という観点から二項対立的な関係性の中で行われる傾向が強かった。しかしながら、Kubota and Lin (2006) や久保田 (2008) も指摘しているように、今後は、言語学的な観点からだけでなく、人種や民族などの他のさまざまな社会的文脈を「ネイティブ」/「ノンネイティブ」の議論に取り入れ、考察していく必要があるのではないと思われる。

さらに、Kubota (2009) は、有能だと思われる「日本語のネイティブ」教師がアメリカにおける就職活動の中で選考対象から外され、結局、「ノンネイティブ」教師が採用されていくという事例を取り上げ、どのような状況においても「ネイティブ」が絶対的な優位性をもち、権力を付与される側に立てるわけではないことを示している。そして、Kubota は「ネイティブ」という概念が創出・維持される際に、権力が人種やディスコース、その他の社会的要素にいかんにか作用するのかを考察することの重要性を指摘している。権力関係というのは社会的要素が絡み合った複雑なものであり、「ネイティブ」だけが権力を保持できるわけではないのだという。権力とは、権力関係という複雑な網目を通じて行使されたり、抵抗されたりするものなのだと述べている (Kubota, 2009, p. 236)。そして、Kubota は「ネイティブ」は「ネイティブ」自身をもつ言語学的属性のために権力が生得的に与えられるのではなく、ディスコースにおいて生みだされた「ネイティブ」という支配的な権力によって価値づけられていると指摘している (p. 245)。

この観点からいうと、権力はディスコースによって生み出される権力関係の闘争の中に存在しているということになる。したがって、「ネイティブ」/「ノンネイティブ」を所与のものとし、絶対的な存在として捉えることは論外だが、従来の言語学的な視点から、両者の間にある権力関係を批判するだけでも十分とは言えない。「ネイティブ」の特権や優位性自体を単純に問題化するのではなく、関係性の中で構築される権力といったものの複雑性を捉える視点が、これらの概念を脱構築していくことには必要なのだと考えられる。

4. 日本語教育における「ネイティブ」/「ノンネイティブ」

3. で概観してきた「ネイティブ」/「ノンネイティブ」に関する議論は、主にアメリカの言語教育の分野で深められてきた。それでは、日本における日本語教育の分野では、「ネイティブ」/「ノンネイティブ」に関する議論はどのように展開されてきたのであろうか。

日本語教育という文脈において、「ネイティブ」/「ノンネイティブ」、「母語話者」/「非母語話者」に関する議論¹は、近年、国内外におけるティームティーチングに関する研究や「非母語話者」教師の資質に関する研究（例えば、阿倍、横山、1991；石井、1996；朱、単、2002；古市、2005；辛、2006、2012；など）、さらには、海外で働く日本人教師/母語話者教師の資質に関する研究（森田、1983；佐久間、1999；平畑、2007、2008；など）において取り上げられてきている。

まず、「非母語話者」教師の役割を肯定的に論じた先駆的な研究として、阿倍、横山（1991）の研究が挙げられる。阿倍、横山（1991）の研究では、「非母語話者」教師が学習者と「母語」や文化的な背景を共有していることにより、「母語」での指示ができたり、これまでの日本語学習経験を生かして学習者に支援ができたりすることが取り上げられ、「非母語話者」教師のメリットとして論じられている。その一方で、日本語力が十分ではないと自己否定に陥る「非母語話者」教師がいることや、「非母語話者」教師の日本語

1 日本語教育の分野に議論の文脈を移す場合に、一つ考慮しておかなければならないことがある。それは、「ネイティブ」/「ノンネイティブ」がそれぞれ「母語話者」/「非母語話者」ということばに置き換えられ論じられる傾向が強いという点である。大平（2001）が指摘しているように、英語の *native speaker/non-native speaker* の訳語として、それぞれ「母語話者」/「非母語話者」という用語が定着しているという点である。「母語話者」/「非母語話者」という概念は、*native speaker/non-native speaker* という用語で示しうる内容の一部しか反映していないにもかかわらず、同一のものとして混同されているのである。例えば、「母語話者」/「非母語話者」という用語の略称として、括弧書きで NS や NNS という用語が用いられるケースがあるが、それらは両者の混同を端的に示しているといえる。そこで、以下、日本語教育という文脈において「ネイティブ」/「ノンネイティブ」という概念を検討する場合には、その下位概念と考えられる「母語話者」/「非母語話者」という用語も含むものとして検討していく。

力の不足を欠点と捉える「母語話者」教師がいることも明らかにされている。

また、共生日本語教育実習における「母語話者」教師と「非母語話者」教師および学習者とのやりとりを分析した朱，単（2002）では、「母語話者」/「非母語話者」教師がそれぞれ異なる役割を担っていることが指摘されている。「母語話者」教師が調整発話モデルを示す役割を担っている一方で、「非母語話者」教師は自身の体験を学習者に提示したり、発話の内容を評価するなどの役割を担っているという。

同様に、多言語多文化共生日本語教育を目指す実習を取り上げ、「非母語話者」実習生の役割に着目した古市（2005）においては、学習者と「母語」を共有していることや日本語学習経験があることにより学習支援ができることや、マイノリティという立場を生かした心理的支援などができることを、「非母語話者」教師が自身の役割だと捉えていることが明らかにされている。また、さまざまな「国籍」の「非母語話者」日本語教師の存在が、従来抱かれてきたような「日本語や日本文化は母語話者のものとされてきた暗黙の了解を崩す」ことに繋がると指摘され、彼らが多言語多文化リソースの体现者となりうると論じられている。

さらに、辛（2006）では、日本国内にいる日本語教育現職者の「非母語話者」教師に対する学習者のビリーフ調査から、「非母語話者」日本語教師の参与意義や役割が明らかにされている。また、「非母語話者」教師へのインタビュー調査からは、日本国内の現場を経験することを通じて、規範的な日本語や日本語教師像が見直され、肯定的な自己評価を行うようになっていったことが指摘されている。さらに、それを踏まえた辛（2012）では、「日本人モデル」を追求しない自己成長の仕方を模索することに加え、日本語教育の現場に向けて、自らが現場に参与することの意義を発信したり、現場の質的な平等を求めていったりする姿勢が「非母語話者」教師には必要であると指摘されている。

これらは、「ノンネイティブ/非母語話者」の属性を肯定的に評価し、教室現場における彼らだけがもつ強みを提示することで、「ノンネイティブ/非母語話者」教師をエンパワメントしようとしている研究だと考えることができる。そして、それにより、「ネイティブ/母語話者」教師のもつ優位性を脱構築しようとする狙いがあると思われる。しかしながら、一見、「ネイ

タイプ/母語話者」, 「ノンネイティブ/非母語話者」という二項対立的な関係性への異議申し立てを行っているかのように見受けられるこの立場にも問題がないわけではない。これらの研究の多くが立脚している, “「ノンネイティブ/非母語話者」教師の言語能力以外を評価することによって関係性を組み替える” という考え方は, Doerr (2009) や Kubota (2009) が英語教育の文脈で批判していたように, 実際には, 現在の二項対立的な構造自体の批判とはなっていない。「ノンネイティブ/非母語話者」教師の言語能力以外を評価することで論点がすり替わり, 結局のところ, 議論の根底では, 「ネイティブ/母語話者」—「ノンネイティブ/非母語話者」といった二項対立が維持され, その中に関係者を振り分けることになってしまっている。言語能力という観点で, 「ネイティブ/母語話者」と「ノンネイティブ/非母語話者」との間に線引きが行われていること自体への批判からは論点がずらされてしまっているため, 議論の根底では, 「ネイティブ/母語話者」—「ノンネイティブ/非母語話者」といった二項対立が維持されてしまっているのである。

また, 論文によっては, 無意識のうちに, 「母語話者教師=ネイティブ教師=日本人教師」, 「非母語話者教師=ノンネイティブ教師=外国人教師」といった二項対立的な関係性の中に人々を振り分けてしまっているものも見受けられる。このことは, 「日本語のネイティブ/母語話者」として「日本人」のみを想定してしまっていることを示しており, 「日本語」を「母語」とする多くの「非日本人」の存在が忘れ去られているといった問題を孕んでいるともいえる。確かに, 「非母語話者」の属性を肯定的に評価することで「非母語話者」教師をエンパワメントし, 平等な関係性を生み出そうとする方向性を読み取ることはできるが, 二項対立的な図式が所与のものとしてしまっている側面があることは否めない。結局, それらの論考が目指していたものとは裏腹に, 「ネイティブ/母語話者」の言語能力に優位性があるから「ネイティブ/母語話者」は権威づけられるとする考え方や「ネイティブ/ノンネイティブ」間の権力関係自体の脱構築には繋がっていないのではないかとと思われる。

一方, 「母語話者」に関しては, 海外で働く日本人教師/「母語話者」教師の資質に関する議論において言及されてきている。その先駆的な研究である森田 (1983) や佐久間 (1999) を踏まえた平畑 (2008) では, アジア諸地

域の日本語教育有識者へのインタビュー調査から、求められている「母語話者」教師の資質として「教育能力」、「人間性」、「国際性」が指摘されている。平畑は、こうした資質が求められる背景には、「日本語を地域共通語とすることも、母語話者性の魅力を否定することも、日本人性につきまとう傲慢さを払拭することも不可能」(p. 17)な状況に教師が置かれているといったことがあると指摘している。「日本語母語話者として、日本人として認識され、均質化される構造から自由になることもできない」が、そうした状況の中で教師ができることは、「母語話者性、日本人性を生み出す功罪を自らに引き受け」ことであり、「同じ言葉を分かち合う相手を望み、必要とする存在として、その地の人々との時間を共有していくこと」(p. 17)だと平畑は論じている。このように、「母語話者」のもつ権威が共有されている構造への自覚が資質として取り上げられている点は興味深い。しかし、そうした「日本人性」や「母語話者性」に教師一人一人が自覚的になるだけで権力関係の脱構築に向けた働きかけは果たして十分であろうか。

ここで取り上げた「日本人」/「母語話者」教師の資質に関する論考は、そもそも「ネイティブ/母語話者」・「ノンネイティブ/非母語話者」間の権力関係の脱構築だけに主眼を置いて執筆された論考ではないと思われるが、こうした議論を通じて、権力関係の脱構築を模索していこうとするならば、一「母語話者」教師がこうした状況を自覚していただくだけでは大きな変革は見込まれない。ある「言語」の所有者として誰かに正統性を与えてしまうという思想が根強く維持されていることから考えても、むしろ重要なのは、そのような、誰かがある「言語」の所有者として見なす思想が創出・維持される構造を可視化させ、矛盾を抱え持つ構造全体を組み替えていくための働きかけなのではないだろうか。常にこうした観点からの議論を研究の俎上に載せ続けていくことが必要ではないかと筆者は考える。

5. まとめ

以上、「ネイティブ」という概念がどのように定義されてきたのか、また、研究が進んでいるアメリカの言語教育において「ネイティブ」/「ノンネイティブ」の概念に対してどのような批判が展開されてきたのかを概観すると

ともに、それらを踏まえ、日本語教育における議論がどのように構築されてきたのかを批判的に考察した。「ネイティブ」/「ノンネイティブ」という概念に対しては、その虚構性が指摘されているものの、アメリカの言語教育の文脈においても依然として共有されているという状況があり、今日に至っては、さまざまな社会状況を考慮した「ネイティブ」/「ノンネイティブ」概念の脱構築を目指した議論が展開されてきていることを明らかにした。また、日本語教育においても、アメリカの言語教育が辿ってきたような議論の展開を経てはいるが、依然として、「日本語」の「母語話者/ネイティブ教師」=「日本人」—《「非母語話者/ノンネイティブ」=「非日本人」》といった図式が想定されることが多いことを指摘した。それは、従来の日本語教育において、「日本語」を学習する「外国人」学習者や「日本語ネイティブ」の「日本人」講師・「日本語ノンネイティブ」の「外国人」講師が圧倒的に多く、「日本語ネイティブ=日本人」,「日本語ノンネイティブ=非日本人」という図式に十全におさまることのできる人々がかなりの割合を占めていたからではないかと思われる。だからこそ、従来の日本語教育における研究では、「国籍」や「血統」などとの関連で「ネイティブ」/「ノンネイティブ」に関する議論が展開されることはほとんどなく、「正しいか否か」といった言語学的な観点から両者の関係性が議論されてきたのではないかと考える。

それでは、このような研究動向を踏まえ、今後、新たにどのような議論を構築することができるだろうか。

例えば、「単一民族国家」(小熊, 1995) という思想に支えられた「日本語=日本人」という図式には取まりきらない、「母語」とする「言語」とそこから想定されがちな「国籍」や「血統」との間にズレをもつような人々、もう少し具体的にいえば、「非日本人」であるが「日本語のネイティブ」であったり、「日本人」ではあるが「日本語のノンネイティブ」であったりするような人々を研究の俎上に乗せるなどして、従来の二項対立的な図式をずらしたり、攪乱させたりしていくような議論の方向性を模索していくことが考えられる。それにより、「ネイティブ」/「ノンネイティブ」という概念に対して、言語学的な観点からのみ展開されてきた、硬直化した議論自体を新しい方向へと導くことが可能となるのではないだろうか。

また、「国籍」や「血統」といった要素に留まらず、さまざまな社会的要素

がどのように絡み合い、「ネイティブ」/「ノンネイティブ」を権威づけるのか、その文脈が意味していることは何かを丁寧に紐解いていくことも必要であろう。「ネイティブ」の優位性を批判することに留まらず、そのような優位性が成立する権力構造を描写することで、「ネイティブ」/「ノンネイティブ」という概念自体の恣意性の証明と脱構築が可能となるのではないかと考える。

グローバル化の進行に伴い、人々の国境を越える移動が加速し、「国際移民」は増加の一途を辿っている。こうした状況は、これまでのような国家の枠組みでは捉えきれない人々を今まで以上に生み出していくものと思われる。そのような流れは、日本語を学び、使用していく人々の間でも確実に起こっていくであろう。日本語教育において展開されてきた従来の研究の多くは、日本語そのものに対する考察やその教育の方法などが多かったが、こうした状況の変化は、より多種多様なバックグラウンドをもつ人々が日本語を使い生活していくことを念頭に置き、こうした日本語を取り巻く環境を具に捉え、「単一民族国家」観に規定された言語観に対する異議申し立てを行っていく研究をより一層必要としていくであろう。日本語を学び身につけていく人々のもっとも身近にいる者として、より開かれた日本語が共有される空間の創造とそれを促していくための研究に今後も関わっていきたい。

文献

- 阿部洋子、横山紀子（1991）. 海外日本語教師長期研修の課題——外国人日本語教師の利点を生かした教授法を求めて『日本語国際センター紀要』1, 53-74.
- 石井恵理子（1996）. 非母語話者教師の役割『日本語学』15(2), 87-94.
- 大平未央子（2001）. ネイティブスピーカー再考. 野呂香代子, 山下仁（編）『「正しさ」への問い——批判的社会言語学の試み』（pp. 85-110）三元社.
- 小熊英二（1995）. 『単一民族神話の起源——〈日本人〉の自画像の系譜』新曜社.
- 久保田竜子（2008）. ことばと文化の標準化についての一考察. 佐藤慎司, ドーア根理子（編）『文化, ことば, 教育——日本語/日本の教育の「標準」を越えて』（pp. 14-30）明石書店.

- 佐久間勝彦 (1999). 海外で教える日本人日本語教師をめぐる現状と課題——タイでの聞き取り調査を中心に『世界の日本語教育 (日本語教育事情報告編)』5, 79-109.
- 朱桂榮, 単娜 (2002). 「共生言語としての日本語」教室におけるインターアクションに関する一考察——母語話者実習生及び非母語話者実習のIRFモデルによる比較『内省モデルに基づく日本語教育実習理論の構築』平成11～13年度科学研究費補助金基盤研究C-2研究成果報告書, 167-204.
- 辛銀眞 (2006). 日本国内の非母語話者日本語教師に対する学習者のビリーフの変容——早稲田の初級実践を通して『講座日本語教育』42, 60-81.
- 辛銀眞 (2012). 非母語話者日本語教師の協働実践——日本国内現場参加者の期待と不安を乗り越えて『韓国日本学会 (KAJA) 第84回学術大会 Proceedings 「転換期の日本研究」』38-42.
- 牲川波都季 (2012). 『戦後日本語教育学とナショナリズム——「思考様式言説」に見る包摂と差異化の論理』くろしお出版.
- 田中里奈 (2006). 戦後の日本語教育における思想的「連続性」の問題——日本語教科書に見る「国家」, 「国民」, 「言語」, 「文化」『リテラシー』2, 83-98.
- 鄭京姫 (2010). 「二分化された日本語」の問題——学習者が語る「日本語」の意味に注目して『WEB版リテラシー』7, 1-10.
- 平畑奈美 (2007). 海外で活動する日本人日本語教師に望まれる資質——グラウンデッド・セオリーによる分析から『早稲田大学日本語教育研究』10, 31-44.
- 平畑奈美 (2008). アジアにおける母語話者日本語教師の新たな役割——母語話者性と日本人性の視点から『世界の日本語教育』18, 1-19.
- 古市由美子 (2005). 多言語多文化共生日本語教育実習を通してみた非母語話者教師の役割『小出記念日本語教育研究会論文集』13, 23-35.
- 森田良行 (1983). 日本語教育界の現状と将来——海外で要請される人材について『日本語教育』50, 89-96.
- 森本郁代 (2001). 地域日本語教育の批判的再検討——ボランティアの語りに見られるカテゴリー化を通して. 野呂香代子, 山下仁 (編) 『『正し

- さ」への問い——批判的社会言語学の試み』(pp. 215-247) 三元社.
- Amin, N. (2004). Nativism, the speaker construct, and minority immigrant women teachers of English as a second language. In L. D. Kamhi-Stein (Ed.), *Learning and teaching from experience: Perspectives on non-native English-speaking professionals* (pp. 61-80). Ann Arbor, MI: The University of Michigan Press.
- Byram, M. (1997). *Teaching and assessing intercultural communicative competence*. Clevedon: Multilingual Matters.
- Canagrajah, A. S. (1999). Interrogating the “native speaker fallacy”: Non-linguistic roots, non-pedagogical results. In G. Braine (Ed.), *Non-native educators in English language teaching* (pp. 77-92). Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum.
- Cook, V. (1999). Going beyond the native speaker in language teaching. *TESOL Quarterly*, 33(2), 185-209.
- Cook, V. (2005). Basing teaching on the L2 users. In E. Llorca (Ed.), *Non-native language teachers: perceptions, challenges and contributions to the professions* (pp. 47-61). New York: Springer.
- Doerr, N. M. (2009). Investigating “native speaker effects”: Toward a new model of analyzing “native speaker” ideologies. A. Curtis & M. Romney (Eds.), *Color, race and English language teaching: Shades of meaning* (pp. 15-46). Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum.
- Firth, A., & Wagner, J. (1997). On discourse, communication, and (some) fundamental concepts in SLA research. *Modern Language Journal*, 81(3), 285-300.
- Kubota, R., & Lin, A. (2006). Race and TESOL: Introduction to concepts and theories. *TESOL Quarterly*, 40(3), 471-493.
- Kubota, R. (2009). Rethinking the superiority of the native speaker: Toward a relational understanding of power. In N. M. Doerr (Ed.), *The native speaker concept: Ethnographic investigations of native speaker effects* (pp. 233-247). Mouton De Gruyter.
- Liu, J. (2005). Chinese graduate teaching assistant teaching freshman

- composition to native English speaking students. In E. Llurda (Ed.), *Non-native language teachers: perceptions, challenges and contributions to the professions* (pp. 155-177). New York: Springer.
- Medgyes, P. (1992). Native or non-native: who's worth more? *ELT Journal*, 46, 340-349.
- Nero, S. (2006). An exceptional voice: Working as a TESOL professional of color. In A. Curtis & M. Romney (Eds.), *Color, race and English language teaching: Shades of meaning* (pp. 23-48). Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum.
- Okubo, Y. (2009). The localization of multicultural education and the reproduction of the "native speaker" concept in Japan. In N. M. Doerr (Ed.), *The native speaker concept: Ethnographic investigations of native speaker effects* (pp. 101-131). Mouton De Gruyter.
- Paikeday, T. M. (1985). *The native speaker is dead!*. Lexicography. (松本安弘, 松本アイリン (訳) (1990). 『ネーティブスピーカーとは誰のこと?』丸善出版.)
- Pennycook, A. (1994). *The cultural politics of English as an international language*. London: Longman.
- Pennycook, A. (2007). The myth of English as an international language. In S. Makoni & A. Pennycook (Eds.), *Disinventing and reconstituting languages* (pp. 90-115). Clevedon: Multilingual Matters.
- Phillipson, R. (1992). *Linguistic imperialism*. Oxford: Oxford University Press.
- Widdowson, H. (1994). The ownership of English. *TESOL Quarterly*, 28(2), 377-389.

付記：本研究は、科学研究費補助金（若手研究（B））「在日コリアン」として生まれ育った在韓日本語教師のライフストーリー研究」（2012～2014 年度，課題番号 24720245，研究代表者：田中里奈）の交付を受けて行われた研究成果の一部である。